

庶民の足、ダラダラ

すずき ひであき
鈴木 英明

民博 グローバル現象研究部

だらだらとザンジバルで
ダラダラに乗ってきました

子守役がまわってきた記念に(二〇〇五年)



交通手段をめぐる文化は国によってさまざま。時間どおりに出発し到着する、そんな日本では当たり前感覚が、海外ではそうではないこともある。本号ではタンザニアのザンジバル島での乗り物事情を紹介する。



乗降口にしがみつきながら客を探すコンダクタ (2009年)



ダラダラは均一料金。大きな荷物は荷台へ (2009年)

速しようとしたら誰かが降りたがり、それを降ろしてまた加速しようとする誰かが道端で手を挙げて乗ろうとする。本場に満員ならば、「やればできるじゃないか!」というくらい飛ばすが、それも束の間だ。基本的にダラダラはだらだら走るものだ。

ダラダラの運転手は他のダラダラよりも集客に良いポジションを得ようとバス停付近では華麗なハンドルさばきを見せる。華やかなハンドルさばきを見せる。特にストーンタウン付近は近距離客の熾烈な奪い合いが繰り広げられる。他方、コンダクタとよばれる集客・集金係はシャッカシャッカと独自のリズムで手のひらのコインの音を立てて集金をしながら、客を探す視線は常に鋭く道端に向けられる。いつかのときは、コンダクタがダラダラを止めたが、一向に客があらわれない。どうなってんだと思った矢先に大きなおばちゃんがひいふーいって乗ってきたことがあった。どうやら彼は車道に直交する小道の向こうにおばちゃんを発見したようだった。

ダラダラでぎゅうぎゅう

ダラダラに定員はない。客は乗せられるだけ乗せるのが基本だ。二人がけの座席の定員は二人ではなく三人であり、四人座らせればなお良。ハイエース型のダラダラには補助席があるが、それももちろん利用される。僕の運がいちばん悪かったときは、補助席が補助席であるために必要な座面のクッションが事もあろうにそこにはなく、ほぼ空椅子状態で乗ったときだった。座席に余裕があるときは子ども席に座れるが、混んでくると子どもは誰かの膝の上に移動する。その誰かはその子

アフリカ大陸東部沖に浮かぶザンジバル島。アラブのようでもインドのようでも、アフリカのようでもあるが、そのどれも混交した文化が息づく旧市街地ストーンタウン、あるいは真っ白なビーチとエメラルドグリーンに輝く海でも知られるこの島は世界的にも人気の観光地だ。多くの観光客は旅行会社が用意したミニバスやタクシーを利用して遠出する

が、島の人の足は基本的にダラダラである。ダラダラとは乗合バスで、バスとはいっても基本的にはワゴン車で、最近では数が減ったが、一〇年くらい前ならば、ピックアップトラックの荷台に木製のベンチを付けて幌を張っただけのものが多かった。いずれも日本の中古車が活躍している。ダラダラはザンジバルに特有のものではなく、ダルエスサラームなどタンザニアの都市でもおなじみの庶民の足である。ケニアに行けばマタトウと名を変え、やはり同じように都市部での日常的な風景に溶け込んでいる。

ダラダラでだらだら

ダラダラはだらだらと走る。だらだら走るからダラダラではないが、ダラダラはだらだら走る。なんでだらだら走るかといえば、ダラダラは決まったルートを走るが、基本的に乗客はどこで降りても良いからである。バス停らしきものはあるが、それを示すものは大抵ない。加

の親や知り合いである必要はなく、近くにいる誰かである。多分、子どもたちはいちばん座り心地の良さそうな誰かをちゃんと見極めている。たまにその誰かに僕が選ばれるときがあるのだが、そんなときはなんだか嬉しくなる。

ダラダラでわいわい

ダラダラに乗ってくる人たちは大体、あいさつをして乗ってくる。「アツサラーマ・アライ・クム」とくれば乗客たちもそれを返すし、老人が乗ってくれば敬意を込めたあいさつ「シカモ」と若者がボソツとます言つ。老人は耳が聞こえている限りは「マルハバ」と返す。そこから会話は始まる。やたらと着飾った親子には隣のおばちゃんがどうしたのかと聞き、若者がうまそうなマンガを抱えていれば、隣のおじさんがどこで買ったのかとそつと尋ねる。僕にも、お前はどこから来た、いくつだ、結婚しているのか、スワヒリ語はどこで教わった、カラテを教えろと質問や要望が浴びせられる。車内総揚げで大騒ぎになることはないが、スマホを手に下を向く人もここにはいない。ダラダラが決まったバス停を決まった時間にも関わらないだらだらラダラはだらだら行くから楽しいのかもしれない。

★
タンザニア、
ザンジバル島



友人(右)の所有していたダラダラ。フロントガラスの上にはルートがしるされている (2005年)